自伝的記憶の安定性
―― 意味記憶との比較（2）――

佐　藤　浩　一
群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座
（2010 年 9 月 24 日受理）

Stability of autobiographical memory remembering :
Comparing to semantic memory (2).

Koichi SATO
Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University
（Accepted on September 24th, 2010）

問　題

【自伝的記憶の安定性】

Galton（1907）は自らを対象として観念連合の研究を行った。彼は手がかり語を記入したカードを用意し、そこから連想される観念を記録した。彼はこの実験を 4 回繰り返したところ、実験環境の変化にもかかわらず同じ観念が連想されることが多いことに気づき、以下のように述べている。「我々が有する観念のストックはごく限られており、精神が活動する際にはいつも同じ道具に頼っている。従って年をとるに連れて精神の通り道はますます固定化し、柔軟性は減ずるのである」（Galton, 1907, p.146）。

しかしながら加齢に伴う変化は、固定化の一途を辿るとは限らない。記憶には意味記憶やエピソード記憶など複数の記憶システムが存在する。意味記憶の場合、加齢により検索が不安定になり、名詞の特徴や、単語からの連想反応を繰り返し尋ねられると、そのつど異なる内容が回答される（Mäntylä & Bäckman, 1990 ; Perlmutter, 1979）、あるいは加齢は影響を及ぼさない（Burke & Peters, 1986）、という結果が報告されている。これに対して、自伝的記憶の想起は加齢により安定化し、同じ出来事がくり返し想起されるようになる（佐藤, 2008, 2010）。

加齢に伴う安定化が自伝的記憶に独自の現象であるなら、それは記憶システムとしての自伝的記憶の特性を示す現象であり、自伝的記憶のみならず記憶システムの統合的理解にも資する知見となるであろう。本研究は佐藤（2010）に続いて、加齢に伴う想起・検索の安定化傾向を自伝的記憶と意味記憶で比較した検討の続報である。

佐藤（2010, 研究 1）は、(1) 4 つの名詞（野球、農業、着物、醤油）それぞれの特徴をあげさせる意味記憶課題、(2) 小学校低学年・中学校・高校・最近 1 年間という 4 つの時期における自己の特徴をあげさせる自己スキーマ課題、(3) 人生を振り返って大切な出来事を 4 つあげさせる自伝的記憶課題、という 3 種類の課題を設定した。そして約 8 週間の間隔をおいて同じ課題に 2 回の回答を求め、安定性（同じ内容が回答される程度）を検討した。青年群（平均 20.3 歳）と成人群（平均 39.3 歳）を比較したところ、自伝的記憶課題、自己スキーマ課題ともに、成人群の方が安定しており、同じ内容が繰り返し回答されやすかった。これに対して意味記憶課題は成人群の方が不安定で、1 回目と 2 回目では回答内容が変化する傾向が見られた。

ところで上記の研究では、課題によって手がかり語が異なっていた。この問題を解消するため佐藤（2010, 研究 2）は、性格特性語（陽気な•緊張した•好奇心が強い・親切な・軽率な）を手がかり語として用い、（1）各特性語があてはまる経験を想起する自伝的記憶課題、（2）各特性語の類義語を回答する意味記憶課題の 2 種類の課題を設定した。そして青年群（平均 19.8 歳）と成人群（平均 40.9 歳）の参加者に、約 8 週間の間隔をおいて 2 回、回答を求めた。2 回の回答の安定性を分析したところ、意味記憶課題では群間の差はなく、自伝的記憶課題でのみ成人群の安定性が有意に高いという結果が得られた。また成人群の参加者に対して、想起された記憶に関する評定を求めたところ、繰り返し想起された記憶は 1 回目にのみ想起された記憶に較べて、重要度•想起頻度・鮮明度・自己象徴度が高いことが見いだされた。

【本研究の目的】

本研究の目的は、先行研究（佐藤, 2010, 研究 2）に以下の変更を加えて追試を行い、自伝的記憶想起と意味記憶検索の安定性に関する知見の信頼性を確認することである。

第一に、2 回の回答の間の間隔を約 3 週間長くし、約 11 週とする。加齢が意味記憶検索の安定性に及ぼす影響を検討した研究（Burke & Peters, 1986 ; Perlmutter, 1979）では、2 回の調査の間隔により結果が異なることが見いだされている。加齢が自伝的記憶の安定性に及ぼす影響についても、再調査までの間隔を長くした上で、安定性を確認することが必要であろう。

第二に、手がかり語を変更する。実験室的なエピソード記憶の実験で単語を記銘材料に用いる場合、具象性やイメージ価などの属性が結果に影響する（今井・高野, 1995）。自伝的記憶研究で単語を手がかり語として用いた場合も、こうした属性が影響する（Rubin & Schulkind, 1997）。本研究で手がかり語として用いるのは性格特性語であり、具象性やイメージ価に大きな違いは無いが、先行研究の知見の信頼性を確認するため、手がかり語を変更する。佐藤（2010）では「陽気な」「緊張した」「好奇心が強い」「親切な」「軽率な」という 5 つの手がかり語を用いていた。性格の 5 因子モデルを参考に、特定の因子や valence に偏らないよう、新たに「暗い」「神経質な」「自己中心的な」「協力的な」「勤勉な」を用いる。(注1)

第三に、自伝的記憶の安定化の過程を検討するために、想起された出来事の特性と想起過程を詳細に検討する。佐藤（2010, 研究 2）では、繰り返し想起された出来事と、1 回目のみ想起された出来語について、重要度（その出来事が当時どれくらい重要だったか）、自己象徴度（当時の自分をどのくらい象徴しているか）、想起頻度（これまでどのくらい思い出したことがあったか）、鮮明度（いまどのくらい鮮明に思い出せるか）の 4 項目について評定（1 ～ 4）を求めた。本研究では 45 項目（佐藤, 2008；附表 1 参照）への評定を求める。45 項目のうち 16 項目は出来事の特性（本人にとっての重要度や自己象徴度、当時の感情、出来事の特定性など）、29 項目は想起特性（鮮明度、一貫性、確信度、リハーサルなど）に関わる項目である。

第四に、手続きの細部を変更する。佐藤（2010, 研究 2）では、意味記憶課題としては、各特性語に対して類義語を 4 つずつ回答させ、一方、自伝的記憶課題としては各特性語に該当する出来事を 2 つずつ回答させた。本研究ではいずれの課題でも 2 つずつの回答とする。また佐藤（2010, 研究 2）では、郵送法で収集したデータや、授業時間中に収集したデータが混在していた。そこで本研究では、参加者全員に郵送法で調査を実施する。

方 法

【参加者】

大学生と社会人を対象に調査を実施した。1 回目の調査に回答した 93 名（大学生 47 名、社会人 46 名）のうち 61 名が、2 回目の調査にも回答した。61 名の内訳は大学生 30 名（青年群：男性 6 名、女性 24 名、19～25 歳、平均 20.3 歳）と社会人 31 名（成人群：男性 17 名、女性 14 名、33～54 歳、平均 41.3 歳）であった。(注2)

表 1　反復事象と単独事象の例

回答者：社会人　男性
性格特性語「自己中心的な」

1 回目回答
（A）　家の事情も考えず、ただ一人暮らしがしたくてある日、家を出たこと。（19 歳頃）　［反復］
（B）　最後の試合でなかなか試合に出られず、監督にふてくされた態度をとったこと。（22 歳頃）［単独］
2 回目回答
（C）　家族のことを考えず、ただ一人暮らしがしたくて家を出たこと。（20 歳頃）
（D）　親の反対を押し切り、高価な登山道具を購入したこと。（17 歳頃）

※この参加者の回答では、（A）（C）が同じ内容であり、反復事象に該当する。（B）は 1 回目にしか記述されておらず、単独事象に該当する。

【手続き】

調査は 3 回にわたって、全て郵送法で実施した。

質問紙は自伝的記憶課題と意味記憶課題で構成されていた。自伝的記憶課題では、「暗い」「協力的な」「神経質な」「勤勉な」「自己中心的な」という 5 つの性格特性語が提示され、回答者自身の経験で各特性語にあてはまるものを 2 つずつ、思い出した順に記述し、経験時の年齢も記入するよう求めた。意味記憶課題では、自伝的記憶課題と同じ 5 つの特性語が提示され、各特性語と意味が似ている表現を 2 つずつ回答するよう求めた。

参加者には予告せず、1 回目の調査から約 10 週後に、同一の質問紙を送付して 2 回目の調査を依頼した。2 回の回答の間隔は青年群が平均 77.3 日（SD＝7.9）、成人群が平均 74.8 日（SD＝5.9）だった。

さらに 2 回目の調査の 1〜3ヶ月後に、追加調査を実施した。1 回目の回答から追加評定回答までの日数は、青年群が平均 132.0 日（SD＝26.7）、成人群が 112.6（SD＝5.4）であった。この追加調査のために、1 回目に同じ手がかり語から想起された二つの自伝的記憶のうち、一方が 2 回目も想起され（反復事象）、もう一方が 1 回目にのみ想起された（単独事象）ケースを抽出した（表 1）。(注3) こうしたケースが無い参加者は除いて、52 名を対象に追加調査を実施した。追加調査では、反復事象と単独事象のそれぞれを提示し、出来事の特性と想起過程に関する質問 45 項目（佐藤, 2008；附表 1, 附表 2）への評定を求めた。参加者には、当該の出来事が反復事象であるか単独事象であるかは示さなかった。また反復事象の記述は、1 回目の回答をそのまま用いた。52 名のうち 50 名（青年群 27 名、成人群 23 名）から回答が得られた。

結　果

【安定性の基準】

2 種類の課題のそれぞれについて、1 回目と 2 回目に反復して回答された記述をカウントして、安定性の指標とした。自伝的記憶課題については記述内容と年齢から、2 回の記述が同じ出来事を指しているか否か判断した。表 1 の例にも示されているように、同じ出来事に言及していることが明白な記述がほとんどであった。

意味記憶課題については、「まじめ」と「真面目な」、「勝手」と「自分勝手な」のように、表現の中心部分が同一であれば、反復と判定した。しかしそれ以上に異なる表現を用いているケース、例えば「自分勝手な」と「自分本位な」等は、異なる反応として判定した。

【安定性の分析】

本研究は佐藤（2010, 研究 2）と同じ枠組みで、手続きを変更して実施されたものである。そこで自伝的記憶課題も意味記憶課題も、佐藤（2010, 研究 2）のデータを加えて、世代（青年, 成人）×調査年（2008 年, 2009 年）の分散分析を行った。なお調査年 2008 年が先行研究の佐藤（2010, 研究 2）に、2009 年が本研究に該当する。

自伝的記憶課題については、5 つの性格特性語に

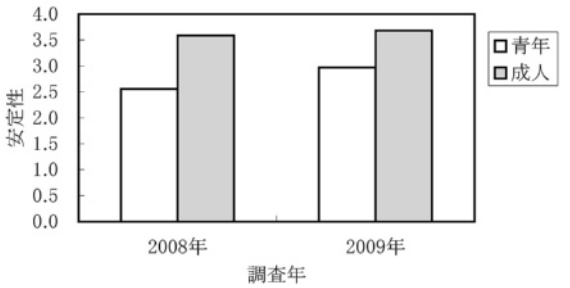

図 1 世代・調査年と自伝的記憶想起の安定性

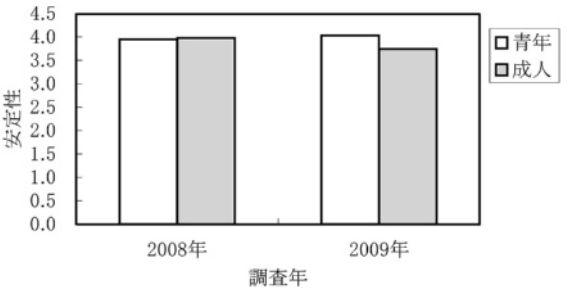

図 2 世代・調査年と意味記憶検索の安定性

対して自伝的記憶を 2 つずつ、計 10 の記憶を回答した参加者の結果を分析した。本研究のデータは 57 名分（青年群 29 名、成人群 28 名）が分析された。佐藤（2010, 研究 2）のデータは 78 名分（青年群 41 名、成人群 37 名）が分析された。安定性の値は 0 ～10 となる。結果を図 1 に示す。世代×調査年の分散分析の結果、世代の主効果のみ有意であり（$F(1, 131) = 7.11$, $p < .01$）、成人群の想起が青年群よりも安定していることが確認された。

意味記憶課題については、5 つの性格特性語に対して類義語を 2 つずつ、計 10 の類義語を回答した参加者の結果を分析した。なお佐藤（2010, 研究 2）では各特性語に対して類義語 4 つずつの回答を求めていた。そこで各特性語に対して 2 つ以上の類義語を回答した参加者に限定して、各特性語に対する初出の 2 つの類義語に基づいて安定性を算出した。(注4) 本研究のデータは 61 名分（青年群 30 名、成人群 31 名）、佐藤（2010, 研究 2）のデータは 85 名分（青年群 44 名、成人群 41 名）が分析された。安定性の値は 0 ～10 となる。結果を図 2 に示す。世代×調査年の分散分析の結果、世代の主効果（$F(1, 142) = 0.26$）、調査年の主効果（$F(1, 142) = 0.09$）、世代×調査年の交互作用（$F(1, 142) = 0.35$）ともに有意ではなかった。従って、意味記憶課題の安定性については、世代の影響がないことが確認された。

【反復想起された自伝的記憶の特徴】

追加評定には、想起された出来事の特定性を問う項目が含まれていた（附表 1、項目 16）。追加評定の結果を検討したところ、反復事象と単独事象で特定性が異なるケースが多数見いだされた。例えば下記のケースである。

表 2 反復事象と単独事象の経過年数

	反復事象	単独事象
青 年 群	5.9（3.4）	7.3（3.7）
成 人 群	20.1（9.5）	19.7（9.5）

（ ）は SD

回答者：大学生 女性

性格特性語「自己中心的な」

反復事象「昼休みはクラスみんなで遊ぶよう指示されていたが、少人数で別の場所で遊んだ。」（11歳頃、似たような出来事が混ざり合った記憶）

単独事象「面倒な委員会を避けられるよう、先に他の委員になっておいて多数決に参加した。」（12歳頃、特定の出来事）

出来事の特定性は、鮮明度など想起過程の評定に影響することが予想される。そこで反復事象と単独事象の特定性が同じであった参加者 25 名（青年群 7 名、成人群 18 名）に限定して分析を行った。(注5)

まず当該の出来事を経験してから現在までの経過年数を算出し（表 2）、事象（反復、単独）×世代（青年、成人）の分散分析を行ったところ、世代の主効果のみ有意であり（$F(1, 23) = 16.16$, $p < .01$）、事象の主効果（$F(1, 23) = 0.07$）、事象×世代の交互作用（$F(1, 23) = 0.22$）とも有意ではなかった。

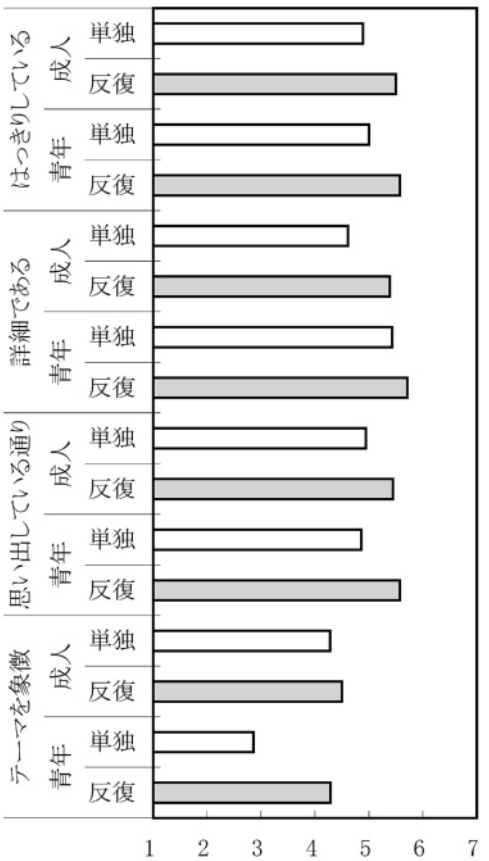

図 3　反復事象・単独事象に対する評定値

表 3　反復事象・単独事象と想起の視点

		当時と同じ	当時と異なる
青年群	反復事象	2	5
	単独事象	4	3
成人群	反復事象	6	12
	単独事象	4	14

数値は人数

続いて、単独事象に対する評定と、反復事象に対する評定を比較した。附表 1 に示した項目のうち、項目 16（特定性）と項目 37（想起の視点）を除く 43 項目の評定値について、事象（反復，単独）×世代（青年，成人）の分散分析を行ったところ、項目 17「この出来事の記憶ははっきりしている」において事象の主効果（$F(1, 23)=6.24$, $p<.05$）が有意であった。また項目 18「この出来事の記憶は詳細である」（$F(1, 23)=3.08$, $p<.10$）、項目 31「この出来事は自分が思い出している通りに起きたことであり、私の想像は混ざっていない」（$F(1, 23)=3.21$, $p<.10$）、項目 4「この出来事は私の人生における重要なテーマを象徴している」（$F(1, 23)=3.72$, $p<.10$）の 3 つの項目において、事象の主効果が有意傾向を示した（図 3）。

項目 37（想起時の視点：当時と同じ視点、異なる視点）については、「当時とは異なる視点から観察している気がする」を選択したケースが多かった（表 3）。McNemar 検定の結果、青年群でも成人群でも、事象による視点の偏りは有意ではなかった（青年群：$p=.500$、成人群：$p=.625$）。

従って、2 回の調査で反復想起された出来事は、1 回目にのみ想起された出来事に比較すると、同じ手がかり語から想起され、経過年数や特定性や想起の視点では差がないものの、より「はっきり」「詳細に」想起され、「想像は混ざっておらず」、「人生のテーマを象徴している」と認識されていることが示された。

考　察

【結果のまとめ】

本研究では、成人群は青年群に比較して、自伝的記憶想起の安定性が高いという知見が、あらためて確認された。加齢に伴って一般的な知識も自伝的記憶もともに増加する。そのことが意味記憶検索の安定性にはさほど影響を及ぼさなかったり（Burke & Peters, 1986；佐藤, 2010, 本研究）、課題によっては検索の変動性をもたらす（Mäntylä & Bäckman, 1990；Perlmutter, 1979）。一方で自伝的記憶課題の場合、加齢は想起の安定性と結びつく（Anderson, Cohen, & Taylor, 2000；高田, 2003；高田・阿波・小俣・鶴田, 2004；佐藤, 2008, 2010, 本研究）。従って、加齢に伴う安定化という点において、自伝的記憶は意味記憶とは異なる特性を有する記憶システムと言える。

【安定化の仕組み】

では何が、自伝的記憶の安定性をもたらすのであろうか。佐藤（2010, 研究 2）で成人群に実施した追

表 4 想起された出来事の特定性

		特定の出来事	1 日以上にわたる出来事	似たような出来事が混ざり合った記憶
反復事象	青年群	8（29.6）	9（33.3）	10（37.0）
	成人群	4（18.2）	14（63.6）	4（18.2）
単独事象	青年群	13（48.1）	4（14.8）	10（37.0）
	成人群	4（18.2）	14（63.6）	4（18.2）

数値は人数，（ ）は%

加評定から、反復事象は単独事象に比べると、重要度、自己象徴度、想起頻度、想起の鮮明度のいずれも高いことが見いだされた。本研究でも反復事象は、自分の人生のテーマに関連する出来事が、確信を持って、はっきり、詳細に想起されるという傾向が見いだされた。従って、青年群でも成人群でも、自己との関連が強い出来事については、その意味づけを考えることが多く、それがリハーサルの機能も果たし、こうした出来事は繰り返し鮮明に想起されやすくなると考えられる。そして加齢に伴いこうした意味づけの過程が活発化することにより（Pasupathi & Mansour, 2006）、一群の記憶が他の記憶よりも想起されやすい状態になり、結果的に、自伝的記憶の安定化をもたらすと推測できる。

しかし本研究の追加調査で、出来事の特性や想起過程に関する 45 項目の評定を求めた結果、反復事象と単独事象で差が見いだされたのは、想起の鮮明度に関わる 2 項目と、確信度に関わる 1 項目、そして出来事の重要性に関わる 1 項目に過ぎなかった。この結果は上記の推測に反するものであり、「記憶の意味づけ」といった自己関与的な過程を経ることなく、自伝的記憶の想起が安定化する可能性も示唆している。

ただし佐藤（2010, 研究 2）でも本研究でも、自伝的記憶の 2 回目の想起から追加調査までの間にはかなり長い期間が空いており、そのことが反復事象と単独事象の差異を曖昧にした可能性もある。この点は手続きを改めて再度検討する必要がある。

【今後の検討方向】

このように、加齢に伴い自伝的記憶の想起が安定化することは、かなり頑健な現象であり、そこに自伝的記憶の独自性を認めることができる。しかし安定化のメカニズムについては、いまだ不明と言わざるを得ない。今後は次に述べる二つの方向で、安定化のメカニズムを検討し、それを通して記憶システム全体における自伝的記憶の位置付けを考えることが必要である。

(1) 加齢に伴う「思い出し方」の変化

第一に、自伝的記憶には加齢に伴い安定性が高まるだけでなく、機能が変化したり（Webster, 1997）、トピックから逸れた発話が増えたり（James, Burke, Austin, & Hulme, 1998）、エピソード的な内容が低減し意味的な内容が増える（Levine, Svoboda, Hay, Wincour, & Moscovitch, 2002）、といった変化が生じる。本研究の追加調査における「特定性」評価を再分析したところ（青年群 27 名、成人群 22 名；特定性に関する評定が欠けていた 1 名を除く）、表 4 の結果が見られた。反復事象も単独事象も、成人群は青年群に較べると、1 日以上にわたる概括的な出来事を記述する傾向が高いのである。

安定化のメカニズムも、こうした変化との関連で検討する必要がある。エピソード的な内容が低減した結果、例えば「部活で頑張った」といった概括的な記述や「夏休みの合宿」といった長い時間にわたる出来事が繰り返し報告されると、これらは反復事象として扱われる。これに対して、エピソード的な内容まで想起された場合には、1 回目と 2 回目には個々別々の「頑張った経験」や「合宿中の特定の出来事」が想起されるため、単独事象として扱われることになる。すると加齢に伴う安定化傾向は、「意味づけ」のように自己関与的な過程を想定せずに説明できることになる。

⑵ 実験室的エピソード記憶との比較

第二に、これまでの一連の検討から、加齢に伴う安定化が自伝的記憶に独自の現象であることが示されたが、はたしてそれが自伝的記憶だけの現象なのか、それとも自伝的記憶も含むエピソード記憶の現象なのかは不明である。そこで、実験室的なエピソード記憶課題と比較することで、自伝的記憶の安定化を検討することが必要である。

ではどのような課題と比較することが可能であろうか。想起の安定性を、「同じ出来事が同じ順序で想起されること」と考えるなら（佐藤, 2008）、群化や主観的体制化（Riefer & Batchelder, 1991 ; Rönnlund, Nyberg, Bäckman, & Nilsson, 2003 ; Witte, Freund, & Sebby, 1990）が、実験室的なエピソード記憶検索の安定性を示す現象としてあげられる。また多試行自由再生では、ある試行で再生された項目が次の試行では再生されないという現象（lost-access）や、反対に、ある試行で再生されなかった項目が次の試行で再生されるという現象（gained-access）がある（Davis, Small, Stern, Mayeux, Feldstein, & Keller, 2003 ; Dunlosky, & Salthouse, 1996；Sauzéon, Claverie, & N'Kaoua, 2006 ; Stuss, Craik, Sayer, Franchi, & Alexander, 1996 ; Woodard, Dunlosky, & Salthouse, 1999）。これらは想起の不安定性を示す現象と言える。(注6)

しかし群化や体制化は、学習者が符号化時に項目間のカテゴリ関連や連想関連に気づいて高次単位を形成し、それを検索時に利用することで生じる現象であり、符号化プロセスの反映と言える（Gregg, 1986；賀集, 1969；桐村, 1985；Klatzky, 1975；波多野, 1969）。また lost-acces や gained-access も、単語リストの完全学習に至るまでの途中で生じる現象であり、各記銘項目に対する学習の不安定性や記憶表象の不充分さを反映していると考えられる（Dunlosky & Salthouse, 1996）。

このように、実験室的なエピソード記憶課題で見られる検索の安定性は、符号化（記銘）プロセスを反映しており、既に十分な符号化（記銘）処理を受けた自伝的記憶の想起の安定性と比較することは無理がある。従って、まず、この問題を解消出来る課題―すなわち実験室的なエピソード記憶課題であり、かつ十分に符号化（記銘）処理を受けた材料の検索―を考案することが必要である。その上で、自伝的記憶の想起と実験室的エピソード記憶の検索を比較し、加齢に伴う想起の安定化が自伝的記憶に独自の現象か検討することが必要である。

注

（1） 性格特性語の選定に際しては、大学生・大学院生 24 名を対象に、以下の予備実験を行った。性格の 5 因子モデル（和田，1996；齋藤・中村・遠藤・横山，2001；柏木・辻・藤島・山田，2005）を参考に、各因子から 3 つずつの性格特性語を抽出した。この際、可能な限り、佐藤（2010）で用いた特性語とは valence が逆になる語を選択した。例えば佐藤（2010）では外向性因子の特性語として「陽気な」を用いたので、今回はネガティヴな valence の特性語を抽出した。外向性は「無愛想な」「暗い」「無口な」、開放性は「臨機応変な」「独創的な」「洞察力のある」、神経症傾向は「弱気な」「神経質な」「憂鬱な」、誠実性は「勤勉な」「計画性のある」「几帳面な」、調和性は「短気な」「自己中心的な」「反抗的な」が抽出された。これら 15 語を一語ずつ読み上げて、30 秒間で具体的な経験が想起出来るか否か、チェックをさせた。その結果に基づいて、具体的な経験を想起しにくい特性語は省いた。また開放性の特性語は、いずれも特定の経験を想起出来ない参加者が多かったため、本研究では用いないことにし、他の因子で肯定的な valence を有する特性語で代替した。以上の結果選択された手がかり語が、本研究で用いる「暗い（外向性）」「協力的な（誠実性）」「勤勉な（誠実性）」「神経質な（神経症傾向）」「自己中心的な（調和性）」である。

（2） 大学生は群馬大学教育学部ならびに新潟大学人文学部の学生であり、筆者が担当する授業中に調査への協力を依頼した。社会人は教員免許法認定講習の受講者、教員免許状更新講習の受講者、教職大学院に在籍する現職教員であり、筆者が担当する授業中に調査への協力を依頼した。協力可能な人には住所氏名を記述してもらい、後日、質問紙を郵送した。

（3） 表 1 のように、同じ特性語から反復事象と単独事象が抽出されたケースについて、追加評定を求めた。なお一人の参加者において、複数の性格特性語で反復事象と単独事象が抽出された場合には、反復事象と単独事象の経験時年齢の差が小さいケースについてのみ、評定を求めた。

（4） 例えば「陽気な」という手がかり語に対して、1 回目に

「明るい」「ほがらか」「安心した」「健康的な」という類義語を回答した参加者が、2回目には「明るい」「楽しげな」「安心した」「あたたかな」と回答したとする。最初に回答された類義語のうち「明るい」と「安心した」の2つが反復されている。しかし初出の2反応「明るい」「ほがらか」に限定すると、そのうち、「明るい」しか反復されておらず、安定性の値は1となる。

（5） 反復事象・単独事象ともに特定の出来事だった参加者が6名(青年群3名、成人群3名)、ともに1日以上にわたる出来事だった参加者が15名(青年群2名、成人群13名)、似たような出来事が混ざり合った記憶だった参加者が4名（青年群2名、成人群2名）であった。

（6） 主観的体制化や群化については、加齢による影響を受けないという結果（Rönnlund et al., 2003）と、加齢に伴い低下するという結果（Riefer & Batchelder, 1991；Sauzéon et al., 2006；Witte et al., 1990）が報告されている。gained-access と lost-access に関しては、加齢によって lost-access が増え（Davis et al., 2003；Dunlosky & Salthouse, 1996；Stuss et al., 1996）、gained-access が低下する（Dunlosky & Salthouse, 1996；Sauzéon et al., 2006）という結果が報告されている。ただし gained-access や lost-access の指標として、直前の再生成績との差をとるか比率をとるかによって結果が変わるとの指摘もある（Davis et al., 2003）。

引用文献

Anderson, S. J., Cohen, G., & Taylor, S. 2000 Rewriting the past : Some factors affecting the variability of personal memories. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 435–454.

Burke, D. M., & Peters, L. 1986 Word association in old age : Evidence for consistency in semantic encoding during adulthood. *Psychology and Aging*, **1**, 283–292.

Davis, H. P., Small, S. A., Stern, Y., Mayeux, R., Feldstein, S. N., & Keller, F. R. 2003 Acquisition, recall, and forgetting of verbal information in long-term memory by young, middle-aged, and elderly individuals. *Cortex*, **39**, 1063–1091.

Dunlosky, J., & Salthouse, T. A. 1996 A decomposition of age-related differences in multitrial free recall. Aging, *Neuropsychology, and Cognition*, **3**, 2–14.

Galton, F. 1907 *Inquiries into human faculty and its development. 2nd. ed*. London : J. M. Dent & Sons.（本書の執筆にあたっては、2004年に Kessinger 社から刊行された reprint 版を参照した。）

Gregg, V. H. 1986 *Introduction to human memory*. London : Routledge & Kegan Paul.

波多野誼余夫 1969 コーディングと有意味記憶 梅本堯夫（編） 講座心理学7 記憶 東京大学出版会 Pp.141–164.

今井久登・高野陽太郎 1995 記憶をさぐる 高野陽太郎（編） 認知心理学2 記憶 東京大学出版会 Pp.27–48.

James, L. E., Burke, D. M., Austin, A., & Hulme, E. 1998 Production and perception of "verbosity" in younger and older adults. *Psychology and Aging*, **13**, 355–367.

柏木繁男・辻平治郎・藤島 寛・山田尚子 2005 性格特性の語彙的研究 LEX400 のビッグファイブ的評価 心理学研究, **76**, 368–374.

賀集 寛 1969 連想と記憶 梅本堯夫（編） 講座心理学7 記憶 東京大学出版会 Pp.67–93.

桐村雅彦 1985 認知と記憶 小谷津孝明（編） 認知心理学講座2 記憶と知識 東京大学出版会 Pp.59–85.

Klatzky, R. L. 1975 *Human memory : Structures and processes*. San Fransisco : W. H. Freeman and Company. 箱田祐司・中溝幸夫（訳） 1982 記憶のしくみ―認知心理学的アプローチ サイエンス社

Levine, B., Svoboda, E., Hay, J. F., Wincour, G., & Moscovitch, M. 2002 Aging and autobiographical memory : Dissociating episodic from semantic retrieval. *Psychology and Aging*, **17**, 677–689.

Mäntylä, T., & Bäckman, L. 1990 Encoding variability and age-related retrieval failures. *Psychology and Aging*, **5**, 545–550.

Pasupathi, M., & Mansour, E. 2006 Adult age differences in autobiographical reasoning in narratives. *Developmental Psychology*, **42**, 798–808.

Perlmutter, M. 1979 Age differences in the consistency of adults' associative responses. *Experimental Aging Research*, **5**, 549–553.

Riefer, D. M., & Batchelder, W. H. 1991 Age differences in storage and retrieval : A multinomial modeling analysis. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **29**, 415–418.

Rönnlund, M., Nyberg, L., Bäckman, L., & Nilsson, L-G. 2003 Recall of subject-performed tasks, verbal tasks, and cognitive activities across the adult life span : Parallel age-related deficits. *Aging, Neuropsychology, and Cognition*, **10**, 182–201.

Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. 1997 Properties of word cues for autobiographical memory. *Psychlogical Reports*, **81**, 47–50.

齋藤崇子・中村知靖・遠藤利彦・横山まどか 2001 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化 九州大学心理学研究, **2**, 135–144.

佐藤浩一 2008 自伝的記憶の構造と機能 風間書房

佐藤浩一 2010 自伝的記憶の安定性―意味記憶との比較

(1)― 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編，**59**, 205-217.

Sauzéon, H., Claverie, B., & N'Kaoua, B. 2006 Age differences in the organization and acquisition-forgetting processes in a multi-free-recall task. *Current Psychology Letters*, **18**, 1-11.

Stuss, D. T., Craik, F. I. M., Sayer, L., Franchi, D., & Alexander, M. P. 1996 Comparison of older people and patients with frontal lesions: Evidence from word list learning. *Psychology and Aging*, **11**, 387-395.

高田理孝 2003 自伝的記憶の検索メカニズム 都留文科大学研究紀要，**58**, 27-34.

高田理孝・阿波 瞳・小俣芳恵・鶴田 望 2004 高齢者の自伝的記憶 臨床教育実践学研究（都留文科大学大学院臨床教育実践学専攻），**3**, 23-31.

和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究，**67**, 61-67.

Webster, J. D. 1997 The reminiscence functions scale: A replication. *International Journal of Aging and Human Development*, **44**, 137-148.

Witte, K. L., Freund, J. S., & Sebby, R. A. 1990 Age differences in free recall and subjective organization. *Psychology and Aging*, **5**, 307-309.

Woodard, J. L., Dunlosky, J., & Salthouse, T. A. 1999 Task decomposition analysis of intertrial free recall performance on the Rey Auditory Verbal Learning Test in normal aging and Alzheimer's disease. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, **21**, 666-676.

※本研究の遂行にあたっては、平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）20530586）の交付を受けた。

附表 1 出来事の特性と想起過程に関する質問項目

【出来事の特性】

1 この出来事は私という人間をよく表している。
2 この出来事は私がどんな人間であるかということを教えてくれる。
3 この出来事と今の自分との間につながりが感じられる。
4 この出来事は私の人生における重要なテーマを象徴している。
5 自分の人生を物語にたとえると，この出来事はその中の中心的な部分になっている。
6 この出来事から私は大切なことを学んだ。
7 この出来事は物事に対する私の考え方や感じ方に影響を与えた。
8 その当時，この出来事が自分にとって大きな意味を持つと思った。
9 振り返ってみるとこの出来事は，自分にとって大きな意味を持っていた。
10 この出来事は私にとって重要である。
11 この出来事は私に影響を及ぼした。
12 この出来事に非常に驚いた。
13 この出来事を経験した時の感情や気分は良かった。
14 この出来事を経験した時の感情や気分は悪かった。
15 この出来事は珍しいことだった。
16 これは特定の場所と時刻に起きた出来事の記憶か，あるいは，かなり長い時間（1 日以上）にわたる出来事の記憶か，あるいは，似たような出来事が何回かあって，それらが混ざり合った記憶か。

【想起過程】

17 この出来事の記憶は，はっきりしている。
18 この出来事の記憶は，詳細である。
19 この出来事を全体的に，よく覚えている。
20 この出来事の記憶には欠けている部分がある。
21 この出来事を思い出すと，場面が目に浮かぶ。
22 この出来事を思い出すと，音や声が聞こえてくる。
23 この出来事を思い出すと，匂いがよみがえってくる。

24 この出来事を思い出すと，味覚がよみがえってくる。
25 この出来事を思い出すと，触覚がよみがえってくる。
26 この出来事に先だって起きた出来事を覚えている。
27 この出来事の後に続いて起きた出来事を覚えている。
28 この出来事を思い出すと，いくつかの場面がバラバラではなく，一つにつながった物語として思い出される。
29 この出来事と関連する他の記憶がたくさん思い出される。
30 この出来事の記憶は正確である。
31 この出来事は自分が思い出している通りに起きたことであり，私の想像は混ざっていない。
32 この出来事を思い出すと，そのときの感情を再び体験している気がする。
33 この出来事を思い出すと，そのときに引き戻される感じがする。
34 この出来事が起きた時に自分がどう感じたか思い出せる。
35 この出来事を思い出すと，再び経験しているような気持ちになる。
36 時には人は，何かが起きたことはわかっているが思い出せないという場合がある。この出来事については，単にそれが起きたとわかっているだけではなく，実際に思い出すことができる。
37 この出来事を思い出すと，当時見たままを自分の目でもう一度見ているような気がする／当時とは異なる視点から観察しているような気がする。
38 この出来事の記憶が突然心に浮かぶことがある。
39 この出来事について，これまで何度も思い出したり考えた。
40 この出来事について，これまで何度も人に話した。
41 この出来事を思い出して，今感じる感情や気分は良い。
42 この出来事を思い出して，今感じる感情や気分は悪い。
43 この出来事を思い出すと，心臓がドキドキしたり，汗ばんだりする。
44 この出来事を思い出すのは簡単だ。
45 この出来事の当時から現在までの時間経過を考えると，もうそんなに経ったのかと思われる。

※項目 16「特定性」については，「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「混ざり合った記憶」の中から選択させた。項目 37「視点」については，「自分の目でもう一度見ている」「異なる視点から観察している」から選択させた。他は 1（まったくそう思わない）～7（とてもそう思う）の 7 段階評定である。

附表 2 追加調査の評定用紙（例）

自己中心的な 8 歳ころ	兄の誕生日なのに，自分の分のケーキが少ないことに文句を言ってけんかをした。	まったくそう思わない	ほとんどそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも言えない	ややそう思う	かなりそう思う	とてもそう思う
1	この出来事の記憶は，詳細である。							
2	この出来事を全体的に，よく覚えている。							
3	この出来事の記憶は正確である。							
4	この出来事の記憶は，はっきりしている。							